

## SDGs 達成のための課題—ボトムアップ型の実践から—

### Challenges for Achieving the SDGs: Implications from Bottom-up Practice

眞嶋 麻子

(日本大学国際関係学部国際総合政策学科 准教授)

2023 年は、2030 年を目標達成の期限としている SDGs にとっての折り返し地点にあたる。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大や世界各地で起こる武力紛争および気候危機などが噴出する世界において、SDGs の達成は大きな危機に直面している。他方で、SDGs を含む 2030 アジェンダが国連で採択されてからの 7 年間に、このグローバルな目標は広く世に知られるようになった。日本社会においても、政府・地方自治体・企業・市民団体・個人などによって、SDGs を達成するための実践が積み重ねられている。

本報告では、危機の時代にある SDGs にとって、ボトムアップ型の実践が改めて重要であることを論じたい。SDGs はグローバルな目標であり SDGs を取り巻く世界情勢は極めて厳しいことを受け止めつつ、達成に向けた前向きな変化には教育や地域社会における具体的な実践が欠かせないと考えるからである。SDGs に向けた様々な取り組みが進む一方で、「SDGs ウォッシュ」「チェリーピッキング」「SDGs は大衆のアヘンである」などの批判もある。このような SDGs が本当の意味で自分事として理解されおらず、SDGs は抜本的な変革の指針としては不十分であるという課題に対して、具体的な実践から示唆を得ることができるであろう。

そこで、2022 年度に国際関係学部で実施した共同研究「持続可能な開発のための教育 (ESD) の課題—教育学・心理学・国際開発論からの考察—」の成果の一部として、沖縄県石垣島でのローカルな取り組みの事例を紹介する。石垣島での実践は従来のものとは少し異なり、行政が主導する SDGs ありきの取り組みではなく、地域社会の人たちが SDGs とは必ずしも関係のないところで行ってきた活動がベースにあるという点がユニークである。地域の人たちが「面白そう」「大切だ」と思ってきた活動が、石垣島に移住してきたキーパーソンたちによってその良さが「発見」され、「SDGs」というツールを使って見える化してきた経緯を報告する。

The year 2023 marks the turning point for the sustainable development goals (SDGs), which had set 2030 as the deadline for achieving the goals. However, the achievement of these goals is facing a major crisis in a world where affected by the COVID-19 pandemic, armed conflict, and the climate crisis. In this keynote address, I would like to discuss the importance of bottom-up practices in achieving the SDGs in these times of crisis. While we accept that the global situation in relation to the SDGs is challenging, we believe that concrete practices in education and local communities are essential to make positive changes toward these goals. Various efforts working toward the SDGs are underway; however, these activities have received some criticism, such as “SDG-washing,” “cherry-picking,” and “the SDGs are the opium of the masses.” In response to these critiques alleging that the SDGs are not truly understood in themselves and are insufficient as a guide for fundamental change, suggestions can be drawn from concrete practice. Therefore, as part of the joint research project Challenges of Education for Sustainable Development, conducted at Nihon University’s College of International Relations in FY2022, I will present a case study of a local initiative held in Ishigaki Island, Okinawa.

## ■SDGsの分類（番号と目標）

目標17 パートナリーシップで目標を達成しよう

## ■ご略歴

2004年3月津田塾大学学芸学部国際関係学科卒業。2006年3月フェリス女学院大学国際交流研究科修士課程修了。2010年9月津田塾大学大学院国際関係研究科博士後期課程単位取得後退学。2023年4月津田塾大学にて博士（国際関係学）取得。2017年に日本大学国際関係学部に助教として着任、2023年より現職。専門は、国際関係学、国際機構論。主な著作に、『UNDP ガバナンスの変容—ラテンアメリカ地域における現地化政策の実践から』（国際書院、2023年）、「SDGs とは何か—貧困のない世界への変革」（『経済』第310号、2021年）など。